

郡山市西部の農村地域活性化

大学生の力を活用した集落復興支援事業

福島大学 経済経営学類 林薫平ゼミナール郡山研究班

(連携先 郡山ふるさと田舎体験交流協議会)

2018年度(活動1年目)報告

(2019年3月)

本研究グループでは、平成 30 年度（2018 年度）に、以下の活動を行った。

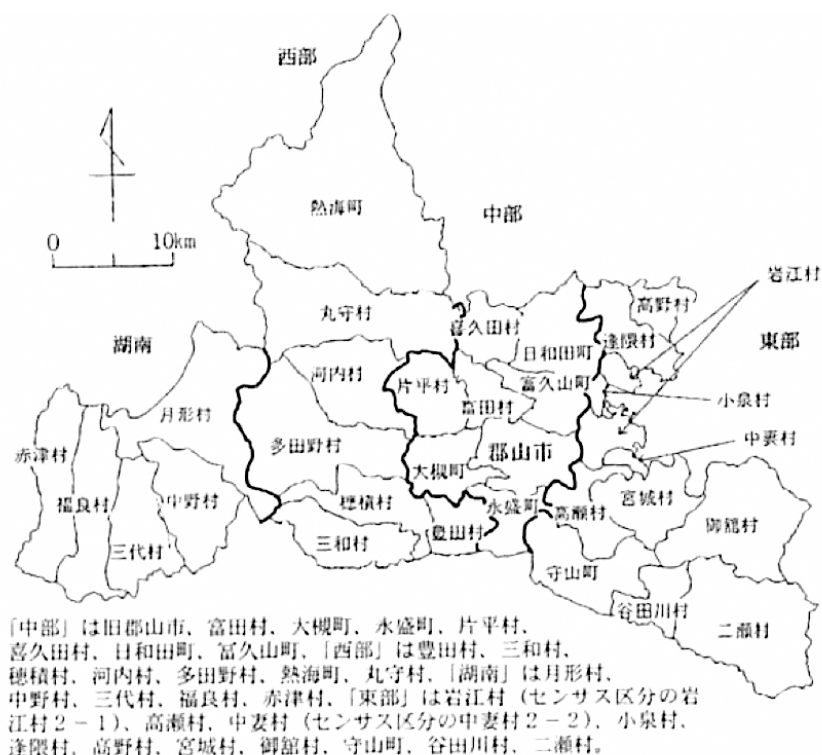
- | | |
|------|-----------------------------------|
| 活動 1 | 郡山市西部農村地域の地域活性化の課題調査 |
| 活動 2 | ふくしま逢瀬ワイナリーフェスへの参加と関係団体のネットワークづくり |
| 活動 3 | 郡山冬野菜研究会の立ち上げとキャベツ餅の新バージョンの試作 |

以下に概略をまとめる。

活動 1 郡山市西部農村地域の地域活性化の課題調査

郡山市西部地域は、農村地域であり、自然や農業や食文化などの農村特有の資源が豊富である反面、人口の流出も続いており、地域の若い担い手が不足してきている。

農村部の魅力を生かし、自然や農業を満喫できる体験型のグリーン・ツーリズムの推進により、郡山中心部や外部から交流人口を呼び込み、地域内に経済効果や雇用効果をもたらしていくことが不可欠である。



※郡山市史 2014「農林水産業」より転載。郡山市西部は、本活動においては、図中の中央

の線から左側（湖南町を含め）を指す。

郡山市西部の人口等

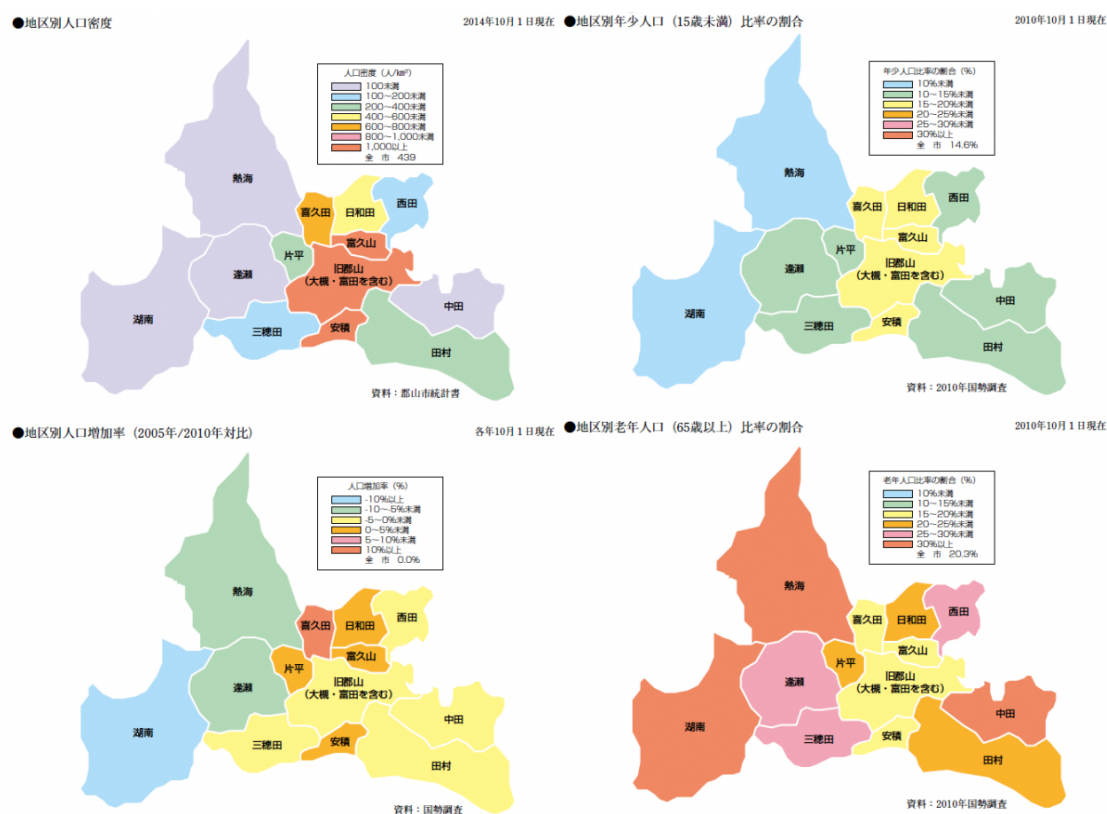
郡山データブックから、市内各区域の 2015 年の人口の動向を見ると、人口密度 1 平方キロ当たり 100 人を切るエリアが市内の西部（および東部の一部）に分布することがわかる。

65 歳以上の老年人口が 30 パーセントを超えるエリアも同様である。

本活動で対象地域とするのは主に逢瀬町である。

逢瀬町は、これまで、以下に述べるような団体が、自然と農業を生かした地域活性化の取り組みを進めてきており、近年はワイナリーも完成して観光の目玉が増えている。

いま、逢瀬町が中心となり、郡山市西部地域の活性化を進めていくことがまず肝要であると考えた。



「郡山データブック 2015」より

逢瀬町の概況



郡山逢瀬出逢いプロジェクト実行委員会 HP より

逢瀬町は奥羽山系の東麓で、郡山盆地の西部に位置し、安積疏水の歴史と、額取山や大将旗山などの名勝地を有する自然豊かな場所である。面積は 71.89 平方キロである。

遠藤喜敬氏の調査によれば、逢瀬町の町名の由来となった逢瀬川はかつて 1965 年郡山市に合併した多田野村と河内村で水争いがあったが、明治の安積疎水の開発事業で水資源が整い豊かな水田地帯となっている。ただし一部多田野の水田では現在でも水不足が懸念されている。

自然や里山に囲まれ、水田が豊富にある風景は観光客を惹きつけ、体験型のツーリズムに大きな可能性がある地域である。

逢瀬いなか体験交流協議会（後述）の「中村さんちのたんぼ」は、冬の間、水を張った田んぼが餌場となり、白鳥が飛来してくる。



※中村さんちの冬水田んぼ（遠藤喜敬氏撮影）



※本研究グループ撮影

逢瀬公園・緑化センター

逢瀬公園は、福島県の「総合緑化センター」があり、豊かな自然や里山を管理して残しながら子どもたちが遊べる公園である。

2014 年公園内におうせ茶屋が新装開店した。郷土料理「きゃべつ餅」が食べられる場所として賑わっている。冬期休業である。



左が逢瀬公園中央広場、右がおうせ茶屋（逢瀬公園・緑化センターHP より）



おうせ茶屋（本研究グループ撮影）

おうせ茶屋では、次の項目に述べるように、人気のキャベツ餅に加えて揚げ春巻き風のキャベツ餅スティックを開発して人気を集めている。

地元の農家や他の団体と連携し、新しい商品をつくっていくことが次の課題である。



※ふくしまおうセワイナリー全景（三菱商事 HP プレスルームより）



2015年10月に完成した郡山市の「逢瀬ワイナリー」
2017年9月、初めての「ワイナリーマルシェ」を開催。

※本研究グループ資料

ふくしま逢瀬ワイナリーが2015年10月27日に三菱商事復興支援財団によって開設された。

2017年3月には県内産の果実を使ったリキュールや、ワインの試飲コーナーをオープンし、同年9月には初のワイナリーフェスが開催された。

2019年3月には県内産のブドウを使ったワインが完成する予定とされており、郡山市西部の観光集客の新たな目玉になっていくことが期待される。

逢瀬いなか体験交流協議会について



※逢瀬いなか体験交流協議会 Facebook より

遠藤喜敬氏の調査および本研究グループの調査によると、逢瀬いなか体験交流協議会は2004年に農業を営む中村和夫氏と逢瀬町商工会が立ち上げた組織であり、都市農村交流を目的とした組織である。

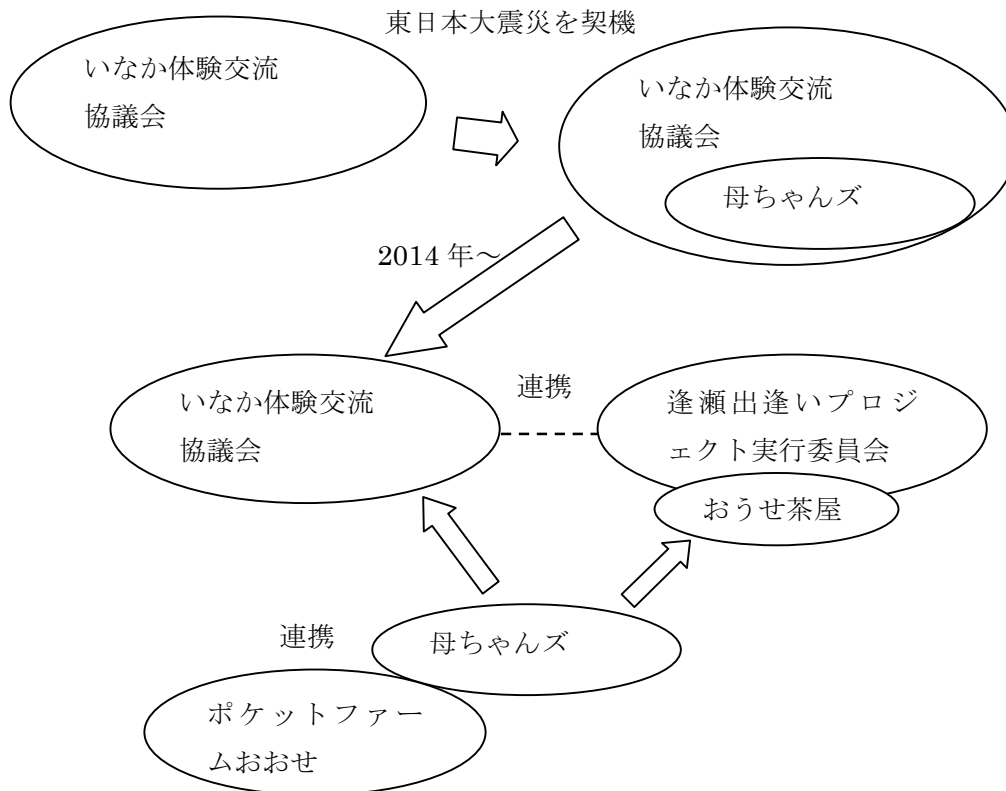
郡山市の「ふるさと田舎体験協議会」で、2005年から実施している首都圏からの田舎体験ツアーがあり、これは当初は湖南町が主体であったが、2009年から逢瀬町も体験宿泊地となり中心的に活動してきた。ただし、2011年の東日本大震災以降は参加者が年々減少しており先行きが不透明になっている。

協議会のお母さんたちの「かあちゃんズ」が、郷土料理を新たなかたちで普及しようと模索している。



母ちゃんズのユニフォーム（遠藤喜敬氏撮影）

逢瀬グリーン・ツーリズム活動の変遷



※遠藤喜敬氏「逢瀬町グリーン・ツーリズムを通した地域の活性化について」2016より

遠藤喜敬氏の研究成果から、逢瀬町のグリーン・ツーリズムの実施に関わる各主体の関係や経緯が発展してきた経緯が、上のように示された。

農業（直売所ポケットファーム）や自然体験に関わる団体が中核となり、おうせ茶屋も連携するかたちができってきた様子が見える。

本研究グループでは、この各主体に加えて、ふくしま逢瀬ワイナリーと、逢瀬町に拠点圃場をもつ鈴木農場（郡山ブランド野菜協議会会員）をさらに連携して、より力強い地域活性化の推進体制をつくろうと試みた。

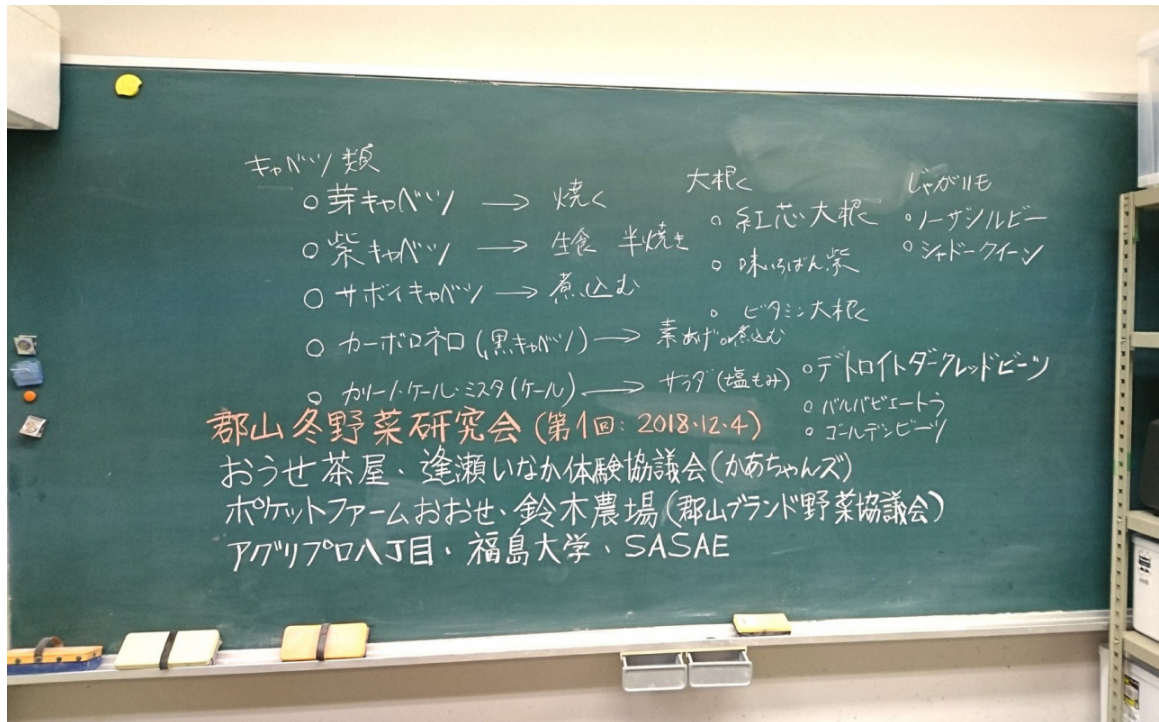
活動2 ふくしま逢瀬ワイナリーフェスへの参加と関係団体のネットワークづくり

2018年8月25-26日に開催された「おうせワイナリーフェス」に参加し、地元の野菜をピザ風・バーベキュー風に調理する出店をお手伝いし、その出店経験の中から、今後、おうせ茶屋や、鈴木農場や、逢瀬いなか体験交流協議会がどのような連携をしていくことができるか検討して、秋以降の活動につなげた。



活動3 郡山冬野菜研究会の立ち上げとキャベツ餅の新バージョンの試作

今年度に試みた活動の一つが、「郡山冬野菜研究会」の立ち上げと、おうせ茶屋の「キャベツ餅」のキャベツ餅スティックにつづく新バージョンの検討である。



鈴木農場の協力により、キャベツ類、ニンジン類など、カラフルで多様な特徴のある冬野菜が集められた。民宿で出す食事に楽しい彩りを添えるような新しい一品を地元の野菜でつくってみることや、おうせ茶屋のキャベツ餅の新しいバージョンをつくってみることが目標であった。





冬野菜は、逢瀬地域の風土の中から生み出されためぐみであり、逢瀬でしか食べられないような料理に仕立てることで、グリーンツーリズムやワイナリーや茶屋の魅力を一つ加えることができると考えた。

なおかつ、そこから、地元直売所での野菜販売の促進につながっていく。

試作品の一つから、シイタケと黒キャベツを用いた揚げ春巻き風のキャベツ餅が有力なものとしてできあがった。2019 年以降に実用化に向けて取り組む。

まとめ

今年度にて得られた成果から、今後の課題が次のように整理された。

- ・地域の各団体の連携をつくることで効果があげられつつある。
- ・とくに、逢瀬いなか体験交流協議会、母ちゃんズ（ポケットファーム）、そして、おうせ茶屋が、近年は連携をつくってきているが、これに鈴木農場、逢瀬ワイナリーという二つの別種の構成員が加わることで、よりふくらみのある地域活性化の取り組みができると考えられる。
- ・今年度は、ワイナリーフェスでできたつながりを糸口に、鈴木農場の冬野菜を、おうせ茶屋や農家民宿で活用できるような新たな料理を協力してつくることをめざして、試作品をつくった。
- ・次年度は、試作品をワイナリーフェスやその他の場面で積極的に打ち出していくことが重要である。
- ・逢瀬に来てもらわなければ体験できないものを、協力してつくりあげていき、さらにまた、逢瀬に来てもらえれば、郡山市西部地域や阿武隈地域の魅力が詰まった体験をできるような内容をつくっていくことが重要である。
- ・茶屋やワイナリーや直売所に、そのような魅力をギッシリ詰め込んだ食をつくることが第一歩になると考える。

引用文献

遠藤喜敬「逢瀬町グリーン・ツーリズムを通じた地域の活性化について」福島大学経済学研究科地域産業復興プログラム特定課題研究、2015 年度提出

郡山市「郡山市史 続編 4」、農林水産業、2014 年

郡山市「郡山データブック 2015」2015 年

郡山逢瀬出逢いプロジェクト実行委員会ホームページ

<http://www.ouse-deai.com/index.html>

逢瀬いなか体験交流協議会 Facebook ページ

<https://www.facebook.com/ouseinakataiken/>

おうせ茶屋 Facebook ページ

<https://www.facebook.com/493810147387191/>